

# 2017 年度

2017 年 8 月 7 日 (月) ～ 8 日 (火)

## 「敬愛ボラ学習」 REPORT

～ 行って・見て・聞いて・感じてから実践へ ～



CHIBA KEIAI High School

千葉敬愛高等学校

# 2017 年度

2017 年 8 月 7 日(月)～ 8 日(火)

## 千葉敬愛高等学校「敬愛ボランティア学習」報告書

～ 行って・見て・聞いて・感じてから実践へ ～

### 目 次

|                        |    |
|------------------------|----|
| 巻頭言                    | 1  |
| 「明日に繋ぐ活動」              | 2  |
| 「道標」                   | 3  |
| 参加者名簿                  | 5  |
| タイムスケジュール              | 6  |
| 引率教員のレポート              | 7  |
| 参加した生徒のレポート            | 13 |
| 現地での様子                 | 34 |
| 事後学習<br>(文化祭展示・証明書授与式) | 38 |
| 資料 1 原発事故避難市町村の震災後     | 39 |
| 資料 2 震災直後の南相馬市         | 43 |

[巻頭言]

## 平成 29 年度 敬愛ボランティアに寄せて

校長 高岡 正幸

昨年に引き続き今年で三度目の、福島県南相馬市、川内村ボランティアを実施しました。

私と薬師寺事務長は、参加者が宿泊でお世話になっている、川内村「いわなの郷」に実は前日お邪魔しました。昨年、6月に「いわなの郷」を訪れ、美味しい蕎麦をいただいたときは、まだ、復興事業で工事に来ている人の姿が見られましたが、今年、ほとんどの人が、観光で村を訪れた人のように見えました。高速道路を下りてすぐの田んぼが耕作されていないことを除けば、少しずつ復興は進んでいるようにも見えました。しかし、報告では、村に帰ってくる若い世代がまだまだとのことでした。

南相馬市小高区の前区長安部さん、川内村遠藤村長さんには毎年快く敬愛生を受け入れて頂き、参加生徒に話をしていただくなど、感謝に耐えません。川内村の子どもたちとのわずかな時間の交流ですが、継続していくこと、関心を持ち続けることが、私たちの責務でもあり、目的なのではと思っています。その意味で、本校文化祭で実施したボランティア体験発表会を聞いて、立派に成果を挙げた体験であったように思います。

今年もお世話になった北原先生、堀内さんはじめ、引率していただいた敬愛高校の先生方にも感謝申し上げます。

## 「明日に繋ぐ活動」

敬愛大学客員教授 北原文成

3回目の「敬愛ボランティア学習」に参加し、今年も生徒と訪問した福島県南相馬市と川内村の現況を肌で感じ、ボランティア精神と心の準備の大切さを再確認しました。

今までの社会では、ボランティア活動イコール、恵まれない人のために行う奉仕活動・慈善活動という認識が強く「～してあげる」という奉仕感・使命感が強調されていたのではないのでしょうか。

現在は、誰しもが持っているやさしさや思いやりをもって周囲の人や生物など広い分野で、自分自身の人間性を高めたいと思っている人々が多くなっています。子供も大人も、高齢者も障害者も、人種を超えた国際交流や地球環境問題にかかわる活動までグローバル化されたボランティア活動が求められていると思います。共に生き、共に学び、共に暮らすために自分で出来ることを考え、自分自身の人間性を向上させる、言わば自己実現させるという考えのもと自ら主体的に関わる活動こそ現在のボランティア活動のあるべき姿だと考えます。

今年も敬愛生の皆さんは、自発的な自由意思によって「敬愛ボラ学習」を選択し参加してみようと決断したことは大変大きな意義があり来年に必ずや繋がることと思います。今回の体験から自分が関心を持った社会的な事柄や関心、興味を膨らませ、これから始まる進路学習、卒業後の新たなステージで花を咲かせる努力と、世のため、人のため、自分自身のために、この貴重な経験を生かしていただきたいと思います。

本学園の建学の精神「敬天愛人」からもボランティアの精神を学び、これから自分の人生を広く国際社会に目を向け、背けることなく、何事にも前向きに行動を起こす「始めの第一歩」となるよう切に願います。

最後に、高岡校長先生、第1回目から素晴らしいフィールドを提供して下さった川内村村長遠藤さん、教育長秋元さん、南相馬市小高生涯学習センター所長安部さんをはじめ、この企画に係わって下さった多くの皆様に改めて感謝と敬意を表します。

ありがとうございました。



## 『道標』

語り部(ドライバー) 堀内広宣

「高校生の声聞くと ホッとする～」

生徒との会話を終えたばかりの 南相馬市前小高区長 安部さんが通路で呟いていた…

川内村では、子供達が外の雨天を弾き飛ばす位の大歓声で体育館で交流会をしていた…

「案内して良かった！」ふと呟く私の胸のなかを、今回案内する道程の中で震災時起こっていた出来事が走馬灯のように思いおこされていた

震災時 両親を思い家に戻って津波で命を落とした同級生！

最後まで住民の安全誘導を全うして津波に巻き込まれた警察官 消防団員！

原子力災害により、安住の地を追われ「家に帰っちゃー！」と言って逝った父！

沢山の想いの出来事があった被災地を語り部として案内する私にとって出発前不安な事がありました。

現在日本各所で起こっている被災地で被災者の方が、報道陣に「見せもんじゃねー！」と言われていたのが脳裏にあったのです。

「6年もたってのに何しにくんだー！」かなあ

しかし、不安のよぎる気持ちを打ち消すような、安部さんの言葉や、参加者と交流する川内村の子ども達の姿を見て「私は、言葉で伝えられない方々の想いを一人でも多くの方々に伝えなければならない！」という想いを再認識する事ができ今回の災害学習を無事御案内することができました。

ボランティアの完成形はありません。私たちも毎回の御案内がボランティア学習なのです。

被災者の気持ちも様々、ボランティアの形も様々 しかし、被災者の気持ちに寄り添ったボランティアを心がけて、自分が今何ができるのか、何をすればよいのかを見極めてボランティア精神を培って頂ければと思います。

災害学習 ボランティア学習はこの2日間だけで終わりではありません！

この2日間は、ボランティアの出発点にある『みちしるべ』にしかすぎません。

今回、参加頂いた皆さんが、日本でそして世界で発生しているさまざまな事故災害に遭遇した時に、この学習で得た少しの経験を大きく生かし臆することなく進んで頂ければと心より望んでおります。

最後に、この災害学習を開催して頂きました千葉敬愛高等学校様各位 参加を御承諾頂きました保護者様に、地元出身者として御礼申し上げます。

そして、子ども達と大汗かいて走ってくれた参加者全員に ありがとう！



松栄高校(旧原町工業高校)



## 2017年度 敬愛ボランティア学習 参加者名簿

| No        | 年 | 組番  | 氏名     | ふりがな      | 性別 |
|-----------|---|-----|--------|-----------|----|
| 1         | 3 | A16 | 油橋 遥   | ゆはし はるか   | 男  |
| 2         | 3 | A17 | 若月 豊   | わかつき ゆたか  | 男  |
| 3         | 3 | A27 | 木村 ちひろ | きむら ちひろ   | 女  |
| 4         | 3 | B24 | 齋藤 菜々子 | さいとう ななこ  | 女  |
| 5         | 3 | C27 | 小林 美月  | こばやし みづき  | 女  |
| 6         | 3 | C41 | 松戸 響子  | まつど きょうこ  | 女  |
| 7         | 3 | D15 | 野田 洸太  | のだ こうた    | 男  |
| 8         | 3 | D18 | 村田 倫幸  | むらた ともゆき  | 男  |
| 9         | 3 | D30 | 須藤 裕里菜 | すどう ゆりな   | 女  |
| 10        | 3 | D31 | 高橋 ありす | たかはし ありす  | 女  |
| 11        | 3 | D40 | 三ツ本 ゆり | みつもと ゆり   | 女  |
| 12        | 3 | G05 | 伊藤 睦貴  | いとう むつき   | 男  |
| 13        | 3 | G29 | 佐藤 花音  | さとう かのん   | 女  |
| 14        | 3 | K06 | 大竹 陸   | おおたけ りく   | 男  |
| 15        | 3 | K36 | 萩田 里美  | はぎた さとみ   | 女  |
| 16        | 3 | K37 | 松浦 美咲  | まつうら みさき  | 女  |
| 17        | 3 | L27 | 久保田 星  | くぼた あかり   | 女  |
| 18        | 3 | M34 | 野島 芽衣  | のじま めい    | 女  |
| 引率者       |   |     | 北原 文成  | きたはら ふみなり | 男  |
|           |   |     | 安藤 正夫  | あんどう まさお  | 男  |
|           |   |     | 上田 知広  | うえだ ともひろ  | 男  |
|           |   |     | 千葉 さと美 | ちば さとみ    | 女  |
| 語り部・ドライバー |   |     | 堀内 広宣  | ほりうち ひろのぶ | 男  |



## 敬愛ボランティア学習タイムスケジュール

日程：平成 29 年 8 月 7 日(月)～ 8 月 8 日(火)

場所：川内村、南相馬市小高区

※ボランティア学習のため、1 日目の朝食、2 日目の昼食は各自ご購入いただくようになります。

| 日 時       | 内 容                              | 備 考        |
|-----------|----------------------------------|------------|
| 8 月 7 日   |                                  |            |
| 7:30      | 千葉敬愛高等学校出発                       |            |
| 8:30      | 常磐道千代田 PA 到着                     |            |
| 8:40      | 常磐道千代田 PA 出発                     |            |
| 9:50      | 常磐道関本 PA 到着                      |            |
| 10:00     | 常磐道関本 PA 出発                      |            |
| 11:30     | 南相馬市原町区ヨークマート到着<br>隣接敷地旧原町工業高校視察 | 語り部：卒業生 教師 |
| 12:00     | 小高区役所到着<br>小高区区長様セミナー(20 分)      | 昼食 休憩 清掃   |
| 13:20     | 小高区内視察出発                         |            |
| 14:50     | 浪江町請戸地区、双葉町、大熊町車内<br>より視察        |            |
| 15:00     | 川内「いわなの郷」到着                      |            |
| 16:00     | 自然体験学習                           |            |
| 17:45     | 各宿坊移動                            | 宿泊準備       |
| 18:00     | 交流館 交流会準備                        |            |
| 18:30     | 川内村との交流会 川内村遠藤村長講話               |            |
| 19:00     | 語らいの夕べ                           | 夕食         |
| 20:30     | 終了 片付け<br>各宿坊移動 懇談 就寝準備 就寝       |            |
| 8 月 8 日   |                                  |            |
| 6:00      | 起床                               |            |
| 7:00      | ラジオ体操                            | 交流館集合      |
| 7:30~8:20 | 朝食 出発準備                          |            |
| 8:30      | いわなの郷出発                          |            |
| 8:40      | コミュニティセンターにて                     | コミュニティセンター |
| ~10:20    | 川内村の子供達と交流ボランティア                 | (各自上履き用意)  |
| 10:30     | コミュニティセンター出発                     |            |
| 10:40     | 広野町 J ビレッジ 車内より視察                |            |
|           | 帰路                               | 道の駅にて各自昼食  |
| 17:00 頃   | 学校到着予定                           | 到着後団長より挨拶  |

## 敬愛ボランティア学習に参加して

(団長) 教頭 安藤正夫

震災から2年経った平成25年、第1回目の震災ボランティア学習に参加した時、南相馬の現状に言葉を無くしました。壊れた家屋、流された車、雑草だらけの田んぼ、決壊した堤防、さらには瓦礫や廃車の集積場。小高駅に行くと、草が生え錆びた線路、無人の駅舎、つる草の絡まった自転車置き場。やはり、自分が現地に行っ  
て見なければ、そして現地の人から直接話を聞かなければ本当の事は分かりません。そんな状況にあっても、丁寧にお話をしてくれた方々や交流した子供達に、逆に元気をいただいたような気がします。

あれから4年が経過しました。常磐道を北上して福島県内に入ると、道路には放射線量の掲示板があり、いわき市を過ぎると線量が上がってきました。周囲は帰還困難区域で、農地は雑草だらけです。もちろん人家に人はいません。それでも南相馬市に入ると、稲や野菜も栽培されており、復旧の様子がうかがえました。小高区役所で南相馬市小高区地域振興課の高橋様、市民生活部の安部様から、「南相馬市の避難指示区域解除後における復旧・復興事業の取り組みについて」、復興に向けた取り組みや問題点を丁寧にお話いただきました。その後、宿泊地の川内村に向けて移動しました。壊れた家屋や車は撤去され、新しい堤防が出来ていて海は見えなくなっていました。しかし、帰還困難区域に入ると家屋も車も震災当時のまま、庭には雑草が生え、門も閉ざされたままでした。

宿舎の「いわなの郷」で、川内村の遠藤村長から、震災当時の状況から全村避難、帰村、復興に向け、さらに新しい村づくりへの取り組み、様々な問題点について、「被災地からの脱却を目指して！」と題した詳細な資料と説明をいただきました。その資料に載っていた、『私たちは人間のコントロールできない科学技術の発展によって、大切な故郷と母校を失った。しかし、天を恨まず、自らの運命を自らの手で切り開いていく』という富岡高校の卒業生の答辞が忘れられません。

2日目は川内村の小学生達と交流をしました。最初はお互いに緊張が見られましたが、小学生たちは明るくて、リレーをしたり、ドッチボールをするうちに打ち解けていました。涼しい日でしたが、汗をいっぱいかいて動きまわる姿は、やはり良いものでした。いただいたスイカは、生徒達にとってはこの上もなく美味しかったと思います。見送ってくれた小学生の笑顔に、生徒達の方が元気をもらったのではないのでしょうか。

復興と廃炉に向けて、沢山のダンプカーが走っているのも、新しい道や堤防が造られているのも、4年前とは大きく違っています。しかし、避難した人達がなかなか帰ってこられないという現実、以前にも増して大きな問題です。何が自分達に

できるのかを考えると、福島状況を多くの人に知ってもらい、出来るだけ福島に行き、積極的に福島の物産を購入する事だと思っております。そのためにも、本校におけるこの学習を継続して、多くの生徒達に福島に行く機会を作ることも重要な事だと思っております。

最後に、我々のために時間を作ってお世話をいただいた皆様にお礼を申し上げます。



常磐道の線量計

# 敬愛ボランティア学習

引率教諭 上田知広

昨年に引き続き、私は東日本大震災の被災地である福島県を訪れました。昨年と比較して何が変わったのか、何が変わっていないのかを自分の目で確かめようと思ったからである。

行程は昨年同様、四街道から茨城県を經由して福島県に入りました。福島県に入ると、高速道路の近くに青や黒のビニール袋で覆われた瓦礫や土砂が多数置かれていた。昨年も目にした光景である。南相馬市・原町区のヨークマートに到着し、隣接する旧原町工業高校の跡地を見学しました。2014年3月に廃校となり、公営住宅が建設された。昨年は完成間近で建物だけであったが、今年はずでに多くの人々が居住していた。地域の人々が生活を取り戻した喜びを感じる一方で、運転手の堀内さんの母校が無くなってしまった悲しさに胸が痛くなりました。

南相馬市・小高区役所を訪問し、地域振興課の高橋さんから復旧・復興事業の取り組みについて説明を受けました。小高区は震災前の人口が約1万3,000人、現在の住民登録が約9,000人である。現在、住んでいる人が2,040人で、約23%の人が戻ってきた計算である。昨年との大きな違いは、今年4月に小学校・中学校が再開されたことです。震災前の12%ほどの数ではあるが、129名の児童・生徒の学ぶ場所が戻ってきたのは、大変喜ばしいことであった。また、高校も工業高校と商業高校が統合して「小高産業技術高校」が4月に開校しました。かつての工業・商業の学科も復活したが、地域の復興に寄与する人材を育成する学校として、再生可能エネルギー・ロボット分野・廃炉などを学ぶコースが新設されたのが特徴である。教育関係の他にも、すでに農業分野では農作物の生産も再開され、稲作は15戸の農家で、20haの水田で作付けが行われている。あわせて、イノシシなどの農作物被害を防止するための捕獲業務も本格化してきている。ただ、風評被害など克服すべき課題が山積しているようである。高橋さんの話で印象的だったのは、「人がいなければ、店が再開できない」ということ。少しずつ人々は戻ってきているが、再開できない地元の商店は多い。家族の離散の問題も抱えている。若い世代が避難先から戻ってこないのも、店を継ぐ人がいないという現状である。

その後、浪江町、双葉町、大熊町をバスで視察しました。とくに、浪江町の請戸地区は昨年までは立ち入りできなかった場所で、津波被害に遭った家屋が数軒とり残され、建物の基礎だけが残っている無残な姿を見た。しかしながら、海岸部の堤防工事は着実に進んでいた。まだまだ時間はかかるが、少しずつ復興に向けて進んでいる印象を感じた。

その後、川内村に移動し、遠藤村長からの講和を聞いた。翌日、川内村のコミュ

ニティセンターを訪れ、小学生たちとの交流ボランティアを行った。小学生は今年も変わらぬ笑顔で元気よく敬愛高校の生徒と遊んでいた。高校生ぐらいの年代は他市や他県に避難して生活しているため、「お兄ちゃんお姉ちゃん」と遊ぶ機会は貴重であり、楽しみにしているそうである。毎年、体育館でリレーをやるのがお決まりのようで、昨年の反省から上履きを用意させたのは正解であった。楽しいひと時は、あっという間に過ぎて帰路に着くこととなった。

今回も 18 名の生徒が参加してくれて、非常に有意義なボランティア学習であった。やはり、「百聞は一見に如かず」で実際に自分の目で確かめるのが大事だということを改めて感じました。テレビの映像とは違う何かを感じ取り、現地でしか聞けない情報を聞くこともできました。参加した生徒とともに、福島で体験した現状について考え、それを伝えていくことが被災地の復興につながっていくと確信しました。



地域振興課の高橋さん、生涯学習センター所長の安部さんの説明

## ボランティア学習に参加して

引率教諭 千葉さと美

今回の引率は、昨年続く 2 度目になりました。今回も福島県の南相馬市と双葉郡の現状を見させていただきました。

昨年の状態とは、大きく変わったところも多く、多くの皆様のご努力やご苦勞を感じました。

昨年同様、東関東から常磐道を北上していくと緑の田園風景が続いていましたが、やはり、大熊町、双葉町を通過したときの風景は、昨年同様耕作していない野原が広がって、壊れたままの住宅もまだ残っていました。ただ、草刈りがされて荒地は昨年より減っている様に感じました。

最初に訪れた原町工業高校跡地では、昨年は建設中だった県営復興公営住宅 5 階建て 4890 戸が完成し、すでに入居されていました。原町工業高校は専門的な資格が多く取得できるので、遠くからも多くの生徒が通学する人気の私立高校だったそうです。原発事故のため、住民のほとんどが避難したため廃校にするしかなかったそうです。

昨年 7 月避難解除された南相馬市小高区では、解除されたばかりの昨年とは、かなり様子が変わっていました。昨年は解除されたばかりで町中の商店はやっておらず、人影を見ることはなかったが、今年は新しい店ができ、少ないながらも人影を見ることができました。損壊・荒廃家屋の解体撤去は 75 %が済み、新築家屋もみられました。また、海の近くでは、堤防の工事がどんどん進められていて、ダンプカーがひっきりなしに往来していました。

4 月から JR 常磐線の小高駅～浪江駅の運転が再開され、浪江駅～仙台駅がつながりました。小高区での公立幼稚園、小・中学校、が再開。地域の復興に寄与する人材を育成する学校として県立小高産業技術高校が、県立小高工業高校と小高商業高校を統合して小高工業高校の校舎で開校。高校生が小高駅を利用するようになった事など、若い人が増え活気が出てきたようです。

小高区内で、イノシシは 26 年度 536 頭、27 年度 653 頭、28 年度 913 頭捕獲、アライグマは 26 年度 12 頭、27 年度 33 頭、28 年度 144 頭捕獲、年々増え続けている有害鳥獣の問題も深刻です。農作物被害だけではなく、野生動物が媒介する健康被害も心配です。

双葉郡川内村では、今年も村長さんが講話をしてくださいました。現在、保育園、小中学校児童生徒の帰村は 47 ～ 48 %。0 ～ 18 歳の医療費無料、高等学校生徒遠距離通学補助（バス定期及び下宿代等、1 ヶ月 3 万円上限）、工業団地整備事業、農業法人の設立、一人親世帯移住支援事業など、若い世代の帰村・移住政策を話されま

した。また、生徒からの質問に答えて、「故郷を離れて、故郷の自然の良さを感じた。当たり前の生活を失って、家庭のありがたさを感じた。1年村を離れて、自然にも人間の手が必要だと感じた。人のいない村は存在しない。」と語られました。

翌日午前中、18人の敬愛生達は川内村の元気いっぱいの小学生たちと体育館でリレー、鬼ごっこ、ドッジボールなど、子ども達が選んだ遊びをして過ごしました。

被災された方々には、まだまだ続くであろうご苦勞を思うと、心が痛みます。遠くに住む私に出来る事は少ないけれど、福島産の食品をできるだけ購入し、できるだけ福島に遊びに行き、授業を通じて風評被害を少し減らす事は、できるかなと思います。

今年も温かく私たちを迎えてくださった、南相馬市小高区の皆さん、川内村の皆さんに感謝申し上げます。



再開された常磐線小高駅の駐輪場

## 「敬愛ボランティア学習」に参加して

3年A組 油橋 遥

私は、今回の敬愛ボランティア学習には友達に誘われて参加しました。その為、特にこれといった強い思いは無く、ニュースでやっているからや、どんな状況なのか興味があるといった程度のものでした。私の親戚の家も津波の被害にあっており、とても恐ろしいものだな、と思っていました。しかし、実際に福島の実地を訪れて自分の目で見てみると被害の規模や状況が想像とは全く違って、6年経った今でも未だに居住禁止区域で自宅に帰れない人や仮設住宅で過ごしている人がいる事を知りました。

私達はまず、小高区役所の人に現状の説明をして貰いました。そして震災で遠くに避難した人達がまだ20%ほどしか帰ってこられていない事を知りとても驚きました。人がいない事で問題も多くあり、働く人も買う人も少ないのでスーパーなどの店を開く事ができないなど、未だにたくさん問題があり、自分の想像していたよりも大変だということを知りました。それから、被害のあった場所を実際に見て回ると話を聞いただけよりも理解が一層深まり、見方が変わりました。

その日に泊まる「いわなの郷」に着いてからは釣り堀でイワナ釣りをしました。自分は1匹も釣ることはできませんでしたが普段やらない事を体験する事ができて楽しかったです。そして村長さんからお話を聞きました。私は、津波の被害や放射線の被害など目に見えるものでしか被害を知りませんでした。しかし不安や不信感、差別などもっとたくさん問題があり、その様な事も含めての復興をしていく大変さを理解する事ができました。「私達一人一人にできる事で、現地を見て欲しい。ご飯や買い物をしてお金を落として欲しい。もし気に入れば、ここで働いて欲しい。」とおっしゃっていました。

このボラ学習に参加した事で、被害の現状など知らなかった事を知ることができました。この体験に参加してよかったと思いました。そして、大学でもボランティア活動に積極的に参加していきたいと思います。



## 「敬愛ボラ学習」

3年A組 若月 豊

初めに私がなぜ、ボランティア学習に参加したいのかと考えた理由ですが、2つあります。

1つ目は、今、現在、メディアで取り上げられることが少なくなってしまった福島県の復興はどうなっているのか？

2つ目は、福島県の人々はどのような気持ちで生活しているのか。

この2つのことを考えながら私が8月7・8日の2日間で人々や自然と触れあって学んだことを書きます。

まず、初めにバス移動で高速道路を走っていると語り部の堀内さんが「左を見て下さい」と言うので見てみるとそこには放射線の影響で汚染された土が袋にかぶさって積まれていました。そこで自分は福島県に着く前から復興は進んでいないのだろうか？という疑問を強く持ち始めました。

そして、福島県に入り小高区役所に着き、役場の人々から町の復興についての話を聞かせていただき、その中で4月から小・中学校が再会したということを知り、段々と人が帰ってこれる町作りがされているのだなと思い先程の疑問はすぐに掻き消されました。

その後、請戸地区という海沿いの所をバスの中から視察していたのですが、堀内さんが「去年はここにも車が流されていた跡があったんですよ」と話していたと思えば次の曲がり角を曲がったら半壊している家があったりと、同じ地区なのに復興されている所されてない所があって、地元に戻りたいのにいまだに戻れない人もいるのだと思い、ショックになりました。

その後、川内いわなの郷に着き、川内村、村長の遠藤さんに時間をいただき人々が戻ってくるためにどのようなことをしているのかを聞かせていただいて、最後に「少しでも良いから福島にもう一度来てほしい」ということを話していて、自分としては、またここに来て、何かボランティアすることができればいいなど、その晩は様々なことを考えました。

2日目は地域の子供達と触れあうことができました。会ったことがない子供達なのに自分達のことを迎え入れてくれて、一緒に遊べて楽しかったです。

最後に、自分が今回のボランティア学習を通して思ったことは復興するために、私達が何かボランティアできることを探し福島に行って実行することなのかな？と思いました。

今回を通して来年も福島でボランティアをしたいと思いました。引率の先生方、語り部の堀内さん、また時間を作って様々な体験をさせていただいた人々に感謝いたします。

本当にありがとうございました。

## 敬愛ボラ学習に参加して

3年A組 木村ちひろ

私が今回敬愛ボラ学習に参加しようと思ったのは、今の被災地の状態を自分の目で見てみたいと思ったからです。震災当時、テレビで東北の津波を見たときに怖いと思ったと同時に、これが今、日本で起こっていることだという実感がわかず、何とも言えない気持ちになったのを覚えています。

福島へ入って最初の方は普通の田舎という印象でした。しかし、進んで行くにつれて人気がなかったり、草が伸びっぱなしになっているのに気がつきました。後で、そこはもう戻れるけど人が戻ってきていない場所だと知りました。福島の中には、このように戻れるけど人が戻らないという場所も多く、大きな問題になっているそうです。また、放射線の影響でまだ立ち入り禁止になっている場所も見ました。そこはフェンスで囲まれており、すれ違う車も作業用トラックばかりでした。作業員の方々はマスクを付けていました。放射線の影響は思っていたよりひどくて驚いたと同時に、今までの震災に対しての自分の考えの甘さを痛感しました。

津波の被害にあった場所へ行くと更にそれを感じました。そこは辺り一面草ばかりで、いくつかの建物があるだけでした。その建物も、窓が割れて中がめちゃくちゃになっていたり、コンクリートの一部がなくなって骨組みがむき出しになっていました。植物も塩害によって色が変わっていました。言葉になりませんでした。バスからは海が見えるか見えないくらいだったのに、それでもここまで酷い状態だと思うとゾッとしたし、六年以上たった今でも当時のまま残っていたことに驚きました。早くここも復興して、元々住んでいた人に戻ってきてもらいたいと思いました。

ボランティアの中で川内村の子供達との交流もありました。子供達はみんなすごく元気で、たくさんの笑顔を見ることができて嬉しかったです。この子供達には、ずっと川内村にいてもらいたいと思いました。

今回のボランティアを通じて震災のことを知ったり、言葉じゃ表しきれないことを感じることができました。これからもっと知っていきたいし、多くの人に知ってもらいたいと思いました。このボランティアでの経験も、何より震災のことも決して忘れてはいけないと強く感じました。



川内の子ども達とリレー

## 敬愛ボランティア学習

3年B組 斎藤菜々子

私は敬愛ボランティアに参加し、実際に福島県に行くことで様々なことを学びました。

バスに乗ること四時間、やっと福島県に着き、バスから視察していると、町はもうほぼ復旧作業が終わり、私の住んでいる千葉県と同じように人が住んでいる地域がありながらも、福島県の東の方に行くと、震災があってから人が入ることが禁止されていて、六年間手をつけられていない場所もありました。そこは、家がほぼすべて流され、家があった場所には雑草が生えているので、あたり一面が雑草の草原で、その中にごくたまに原型を失った家が残っていました。私はその景色が一番印象に残っています。ここまでひどくなくても、ビニールシートで覆われた瓦礫や土砂があちらこちらにあったり、家のアンテナが斜めに傾いたままだったり、家を失くした人達のために高校が廃校になったり、そこに家が建ったりなど、福島県では復旧作業はまだ終わっておらず、やらなくてはいけないことがまだまだあることがわかりました。

次に、小高区の生涯学習センター所長さんのセミナーがありました。そこで所長さんが、私達学生や他の県の人達に一番してもらいたいことを話して下さいました。それは、“現地にきて学ぶ”ということです。南相馬市は、もうほとんど放射能の被害はなく安全に暮らせるそうです。しかし、風評被害が多く、人がいない影響で店は開けられず、困っているそうです。なので、ボランティアなどを機に、南相馬市を訪れれば安全ということが分かるので、一番は、現地に来てほしいとおっしゃっていました。その次に行った川内村の村長さんの講話でも、原発事故の影響で、福島県の人達が、病院で避けられたり、ガソリンスタンドで福島県のナンバーだと断られたりとたくさんの差別があったそうです。それらの原因は、ほとんどの人が福島県のことについてよく知らないことにあると思います。なので、福島県に行って、見て、聞いて、感じた私達がまずは自分達の経験を生かして、周りの人達に話すことが大事だと思いました。そうすることによって、福島県に行く人が増え、少しでも早く、復旧できたら良いなと思いました。

翌日は、川内村の子供達と遊びました。子供達はとても元気が良く、人なつこくて可愛くて、別れるのがとても悲しかったけど、たくさん遊んで、一緒に楽しい時間を過ごすことができました。

最後に、二日間震災の話や場所に直面して、実際に被災地に訪れてみなければわからないことがたくさんあると感じました。これからは、この経験を生かし、自分には何ができるのかを考え、できることから、やれることやっていきたいと思いません。そして、大学生になったら、もう一度福島県に行きたいと思いません。

## 「敬愛ボランティア学習」に参加して

3年C組 小林美月

私が今回この敬愛ボラ学習に参加した理由は、東日本大震災から6年経った今、テレビで取り上げられる回数も減り、現地の復興状況がわからず、自分の目で確かめたかったからです。実際に現地に行ってみて、私は様々なことを感じました。正直、震災から6年も経っていれば町も復興し、商店街を明るくにぎやかなのかなって思っていました。しかし四街道から四時間ほどかけて到着した南相馬市は、自然豊かでとても静かな町でした。市内にある堀内さんの母校、松栄高等学校は、震災から三年後に廃校になり、現在跡地には災害公営住宅になっていました。堀内さんは、母校がなくなるのはとても悲しく、同級生と母校に遊びに行くことができなくなるのは寂しい、とおっしゃっていました。続けて私たちに、敬愛は多分なくなるから、今学校に通えることや、卒業後もお世話になった先生方に会いにいけることに感謝してほしいということもおっしゃっていました。

そして、堀内さんの実家は双葉町にあります。しかし町のほとんどが国の許可がおりてやっと一時的に家に帰ることができるという帰還困難地域で、堀内さんの家もその区域内にありました。バスでは家のすぐ近くを通っているのに、目の前にある自宅には帰れない。私はとても悲しく、切ない気持ちになりました。震災直後の堀内さんのお気持ち、6年経った今、母校を失い、目の前にある実家に帰れないお気持ち、自分がどれだけ考えても、想っても、それは堀内さんのお気持ちのほんの一部にも満たないのかもしれませんが。被災された方々の悲しみや苦しみを全て理解することは、できません。そんな自分が悔しいです。ですから、被災された方々のお気持ちを考えてから復興支援に携わる人がもっと増えたら、とても暖かい支援活動になって良いな、と想います。

最終日、川内小学校の子供たちと遊びました。中高生になると市外へでていくことが多いので、中高生とふれあう機会があまりないとききました。そんな中、自然豊かで風が気持ち良く、空気がおいしい川内村の子供たちは、千葉の小学生となにも変わらず、明るく元気いっぱいでした。それまでいくつかの市をみてきたけれど、どこも人の数は少なく、当時のまま残されている建物もあり、少し不安な気持ちでした。ですが子供達や市の方のお話をきいていると、ゆっくり、確実に復興しているんだなと安心しました。

最後に、川内村の村長さんに、震災から六年経った今でも変わらなかったことはあるかという質問に対する答えがとても素敵だったので心に残っています。それは四季を五感で感じられる自然豊かな川内村への愛。家庭の大切さや暖かさ。これらは震災前と変わらないどころか増しているそうです。そしてそのことを再確認し、その大切さにふれることができたのは、震災から得たことだといいます。

今回伺った皆さんのお話の中で共通するものは、あたり前が本当はあたり前では

ないということだと思いました。自分は今、何不自由することなく生きています。それがどんなにすごくて、どれだけ幸せそのものなのか。今回体験したもの、全て胸に焼きつけ、一日一日を大切に生きたい、と思いました。



帰還困難区域の住宅



川内村の子ども達と

## 「敬愛ボラ学習」を終えて

3年C組 松戸響子

私は今回のボランティアで初めて福島を訪れました。震災当時、テレビでは何度も被災地の状況を見ていましたが最近では見るのがだいぶ少なくなり、今はどのような状況で、どのくらい復興しているのかをまったく知りませんでした。そしてこの敬愛ボラ学習があると聞き、自分の目で見て感じてみたいと思い参加しました。震災があった当時、私は小学五年生で近所の友達の家遊びに行っていて、机の上のものが落ちたり水槽の水が溢れ出たしまったりと私の住んでいるところでさえ今まで体験したことのないほどの地震でした。

しかし、福島県を含め東北地方は私の住んでいるところとは比較にならないほどの大きな地震で、さらには今までに見たことのないくらいの津波が起こっているのをテレビで見ました。

今回行ったところには津波や原発事故などの被害を大きく受けた場所でしたが、原発の復興は思っていたよりもだいぶ進んでいるように私は思いました。しかし、海岸部は震災が起きたときそのまま家はほとんど建っておらず、時間が止まっているかのような様子でした。中身が何もなくなった家は震災の悲惨さや被害の大きさを感じさせられました。海岸部から離れていくにつれて新しい家が多く建てられているように見えました。逆に警戒区域であった場所は、とくに復興が遅れているように感じ、お店などに人はおらず閉まっているところばかりでした。元々住んでいた人が帰ってこないという問題が大きくあげられていました。どのようにしたら人が戻ってくるのかという問題を解決するために、工夫した取り組みが多くとられていました。

一日目はイワナ釣りやバーベキューなど、普段あまりできないような自然にふれあう体験をすることで五感を使って川内村の良さを感じたり気づくことができました。

二日目の朝食はおにぎり二つとみそ汁でした。私たちは何の問題もなくいつもおいしいごはんを食べることができています。ですが震災時、被災地では二人で一つのおにぎりを半分にして食べていたと聞いて、私たちが当たり前のように食べている食べ物は全く当たり前ではなく、おいしく、さらにお腹いっぱい食べられるということは本当に大切に幸せなことなんだと改めて感じました。

朝食を食べた後、川内村の小学生とリレーやドッチボールなどをして遊びました。小学生は終始元気で明るくて私たちまで元気をもらいました。

今回のボランティアを通して、復興されているところも多くありましたが、まだ何も手をつけられていないところがあったり人が帰ってこない地域が成り立たなかったりといった問題が山ほどあることに現場に行って自分の目で見て知ることができました。そのような問題を少しずつでも解決していくこと、家庭がある大切さや、今過ごしている当たり前の生活を送れることに感謝しようと思いました。

普段学校で関わりのなかった友達とも仲良くなれたりこのボランティアで得たもの、感じたもの、学んだことを家族、友達からたくさんの人へと伝えていきたいです。



いわなの郷交流館で、おにぎり2個とみそ汁の朝食。堀内さんのお母さんが避難した当時と同じです。



津波の被害を受けた住宅

# 現在の福島県

3年D組 野田洸太

私は8月7日8日の2日間の福島ボランティアに行きました。今回のボランティアを通じて、東日本大震災の復興の不完全さと地域住民の温かさを知りました。私が福島について最初に思ったことは、本当に日本なのかなと思うほどの、風景の違いです。汚染土が大量に入った土袋に、野原の真ん中にぽつんと一つ中身のない空っぽな家、人の手が遠のき草がたくさん生えている畑や田んぼが福島原発事故の残酷さや無情さを物語っており、とても冷たい感覚が襲ってきました。最近のニュースなどでは、被災地の復興に対する報道が少なく、復興が終わったのかと思いがちですが、今後の復興には何十年も渡っての除染作業が必要になります。また、風評被害や人離れも深刻な問題となっています。福島で、被災地で作られた作物だから、食べてもいけないのに買わずに懸念するのは違うと思います。しかし、現状では被災地だから、放射線が気になるからという先入観だけで買ってもらえないのが現在の大きな問題です。被災地の復興には、まず地域の活性化が必要です。そのため、多くの人々が積極的に福島やほかの被災地の商品を買うことをしなければならないと私は考えました。

被災後、多くの方は地元を離れ全国各地に散らばり、引っ越した先でそれぞれの生活を送っています。引っ越した先で学校に通い、仕事をし、生活をしているためなかなか地元に戻って生活することが難しくなっています。そのため、福島には活気はありませんでした。しかし、そこに住んでいる人たちはとても元気で明るかったです。二日目に双葉町の子供と遊ぶ機会がありました。子供たちは私の地元にいる子供よりも元気で明るく無邪気でした。とても人懐っこく、「アンパンマン」や「パン工場」などのあだ名を付けられました。バスで帰るギリギリまで大きな声でバイバイ！って言われた時はとても嬉しく、とても寂しく感じました。

ボランティアを終えて、1番心に残ったのは、いわなの郷で河内村の村長さんが読んだ、ある女子中学生の手紙です。「早く川内村に帰りたい、都会はもう十分。自分の子供ができたなら川内村でバレーボールをやらせたい。看護師になって戻ってきたい。」と言った内容でした。復興が未完全な今、引っ越した先で寂しい思いをしている人のためにも早く復興してほしいと強く感じました。

## 敬愛ボラ学習に参加して

3年D組 村田倫幸

自分はこの敬愛ボラ学習に参加して良い経験が出来たと思います。参加した動機は、指定校推薦などの大学入試や、高校生活で何をしたかという問いに答えられるようにする為でした。それに、現地に行く前までは、あれほど大きな震災でしたが、既に何年も経っているので復興もある程度進んでいると思ってました。

しかし、南相馬市へ着き、その現状をこの目で見ると自分の考えがどれだけ浅はかだったのかを思い知りました。現状の南相馬市と、自分が想像していた復興がほとんど終わっている南相馬市とでは、驚くほど差がありました。既に多くの家が建っていると思っていたけれども、実際は高校があった場所などに公営住宅が建っていて一戸建ては、限りなく少なかったです。

実際に津波があった場所へ行き、ここまで津波がきたということを聞くと、当時自分がテレビで見た津波が、ほんの一部分だけだったという事を改めて知り、自然の怖さを感じました。

そして自分が一番驚いた事が、もともと住んでいた人の四割ほどしか今の福島に帰って来ていないという事でした。もとの四割ほどの人口なら、この規模での復興も、とても難しかったものだと思います。しかし帰って来ていない人の中には、原発事故や地震の恐怖があり帰れないという人もいるので、もともと住んでいた人の全員が帰ってきて復興というのも、難しいことだと思います。

二日目には、川内村の子供達と遊びました。自分が通っていた小学校は、一学年で百人以上もの人数でしたが川内村の小学校では、一学年一人という学年もあり震災後の人数の少なさを目の当たりにしました。

今回の経験を経て、いかに自分が復興の大変さを知らないか実感できました。ぜひ大学に入っても積極的にボランティア活動に参加していこうと思いました。



津波被害のあった田んぼ。向こうに新しい堤防ができています。

## 現地に行く

### 3年D組 須藤裕里菜

一泊二日で現地に行った。四街道から福島県南相馬市までのバス内、ドライバーの堀内さんからアナウンスがあった。現在のマイクロシールドがわかるという電光掲示板の説明があり、車窓から見えた。さらに視察していると、道路脇には黒い袋があった。これは除染した土砂や瓦礫であるという。数えきれないほどの黒い袋が並んであり、わずか一年間で増えたと言っていた。しだいに土砂を運んでいるダンプカーなどを見かけるようになった。

南相馬市の小高区は地震、津波、そして原発の被害を最も受けている。小高区の区長さんの話では小高区を含め南相馬市の復興について聞いた。6年経った今は面的除染作業は完了している。今年の4月からはJR常磐線小高駅の運転が再開された。実際、駅の駐輪場に雑草などが無く、きれいになっていた。さらに、小高区の小・中学校も再開した。

区域によって異なるが、放射能が下がり人も住めるようになってきている。そこでは、安全性を確認するため米の実施栽培を行った。昨年度の検査結果により、安全に栽培できることがわかった。現在は自給自足している住宅もある。ハウレンソウ、キャベツ等の野菜の出荷制限も帰還困難区域を除いて解除されている。区長さんは米による健康被害は100%ないと言っていた。農業が盛んな福島に戻れるのではないかと嬉しく感じた。しかし、稲作はできるが酪農は再開できていない。その理由にブタ、ウシが放射能により殺処分されたため。もし作れても、売れるという信頼性が低いと難しいのである。小高区のスーパーではまだ生肉が売っておらず真空パックしかない。そのため隣町まで生肉を買いに行かなければならない。また、ドライバーの堀内さんの母校が原発事故によって休校になった。そして再開しても生徒が集まらず廃校になってしまった。生まれ育った場所が変わることがいかに辛く悲しいか、区長さんや堀内さんの言葉一つ一つで感じた。

第一原子力発電所6号機がある双葉町をバス内で視察した。ここはまだ人が戻ってこられる区域になっておらず、除染作業している方は特殊なマスクをつけている。家々が空き巣になっているため家までの小道にはフェンスが設置され、管理されている。この地区は瓦が崩れたままである。また、田んぼの真ん中には車があり、そこには野良犬、野良猫ではなく野良牛がいるという。かつては酪農が盛んであったのだなと感じた。さらに、木の上の方の枝や葉は青々としているが幹は白く細くなっている。それは海の潮により育たなくなってしまうためである。海岸沿いの地域では更地になり、木は上の枝まで白くやせていた。被害の大きさを改めて知らされた。

テレビの映像や文字だけでは感じられないこと、見られないことを現地に行って学べた。今回得たものを生かし、現地の力になりたいと考えている。そして、これ

は決して風化させてはならないことだ。行ったことのない方には、ぜひ現地に足を運んでもらいたい。もし、同じことが起こるならば、被害を小さくする対策ができるだろう。完全に防ぐことはできないかもしれないが、現地に行くことで、徐々に感じられるものがあるはずだ。



枯れてしまった林



津波被害の住宅

# 災害ボランティアを終えて

3年D組 高橋ありす

今回、私が災害ボランティアを希望したのは六年経った今、ニュースでも取り上げられることが少なくなってきたからです。また、目で見て自分が行って感じたことをたくさんの方に伝えていけたら。と思い参加しました。

被災地に実際、足を運び、見た景色は言葉を失う様な所も見ました。津波の被害で何も無い所にポツンと残された木。放射線の影響で家に帰れない帰還困難区域。六年経ってもその様な地域が沢山ありました。

今回南相馬市の市役所の方に小高区の復興事業に関しても教えて頂きました。放射線への不安軽減対策として、食料品や農作物等の放射線測定を継続し、市の広報紙等でお知らせをしていることや、アニメや地元の文化を取り入れた「オカエリ夏祭り」などの活動をしていることを教えて頂きました。

また、今回ドライバーをして頂いた堀内さんの地元、双葉町をバスの中から見学しました。双葉町はまだ、帰宅困難区域であり、家も震災当時のままだと教えて頂きました。

自分としても今回のボランティアを通して改めて自然災害を考えることが出来ました。今、私に何が出来るのか、これから何をしたら少しでも復興の力になれるのか。よく考えると難しく、一番は実際に行って力になるのがいいと思います。ですが、身近なことを継続することも大事だと考えました。募金活動に参加したり、節電をしたり。とても小さな事を継続していれば大きな力になると思いました。時間と共に意識が薄れてしまっている今だからこそ行っていくことの大切さを知れるのではないかなと感じました。これからの未来に繋がるような行動を心掛けていきたいと思います。



塗装をしていないダンプカーと帰還困難区域を示す看板

## ボランティア学習に参加して

### 3年D組 三ツ本ゆり

私はボランティアに参加してたくさんの事を学びました。今度私がボランティアに参加した理由は、東日本大震災から6年が経ち、どのくらい復興しているのか実際に見て何か自分にできる事はないのかと思い参加しました。

まず福島県の南相馬市を訪れました。そこは、私が想像していた以上にひどく、言葉がでませんでした。建物はあまりなく、緑の田園風景がずっと続いていました。バスの中から見えたのは、耕作していない田畑や、津波で壊されて、中身がなく建物の形だけが残っているものも多くありました。放射線の除染された土が入っている黒い袋やガレキなども大量に置かれていました。震災から6年も経つのに、元の状態に戻るにはまだまだ時間がかかるのだなと思い改めて、震災の恐ろしさを感じました。

また、私たちはバスの中から双葉町、大熊町といった、放射線の被害がまだ続いていて許可がもらえないと入ることのできない地区を見ました。お店や家はあるが人が誰1人といなくて不思議な感じでした。自分の家だとしても1日いることはできなくて、掃除をやりに来るくらいだそうです。また車は、3月11日のままずっとその場に放置になってありました。私はこの現状を見てとても心が痛みました。自分の家に帰りたいのに帰れないのはすごく辛い事だと思います。少しでも早く失ったものを取り返す事が出来れば良いです。2日目私たちは川内村の子供達と交流をしました。リレーや、ドッジボールなど沢山遊ぶ事ができました。子供達がすごく楽しんでいて、自分も普段なかなかする事のできない貴重な体験が出来て良かったです。

今回敬愛ボランティアに参加して、短い時間でしたが、福島の現状を知る事ができて色々か経験ができました。これからも積極的にボランティア活動に参加し少しでも困っている人の力になりたいです。福島で学んだこと経験したことを生かしてこれから、社会に貢献していきたいです。



川内村の子供達とリレー

## 福島の良いところ

3年G組 伊藤睦貴

自分は8月7日から8日に渡って行われた福島災害ボランティアに参加させていただきました。このボランティアに参加した理由二つありました。一つ目は自分の志望する大学の面接に使えるかもしれないと思いました。二つ目は自分の住んでいる横芝光町は東日本大震災による地震の津波によって沿岸部は震災に遭いました。自分も沿岸部に住んでいます。ですが、幸い自分の家は大丈夫でした。しかしもっと海に近い親戚や友達の家は津波の被害に遭いました。おじいちゃんの友達も津波によって亡くなりました。このような悲しい経験から今回のボランティアの話を知ったときにぜひ参加したいと思いました。

震災から6年たちました。自分はバスの中では、「あれから6年たったし生活できるぐらいには復興しているのではないか」と思っていました。その後バスは高速道路に乗り4時間ほどで福島県に入りました。その時バスの中で自分は衝撃的な光景を目にしました。なんと田んぼが草だらけなのです。自分の家は田んぼを作っています。そのため家の周りには田んぼしかありません。そんな自分からすると草がたくさん生えている田んぼを見るのは初めてでとても衝撃を受けました。しかも雰囲気がとても住んでいるところとそっくりだったため驚きました。それから福島県の沿岸部をバスの中からみました。そこには建物が何もなくその光景は言葉を失うものでした。ここに6年前まで家が建っていたとは思えませんでした。津波の怖さを再確認させられました。

川内村の村長である遠藤さんが言っていた言葉が印象に残っています。それは「深刻な風評被害」です。福島のお米は汚染されてるだとかまだ放射線でいっぱいだとか悪い噂が世の中に出回っているのが現状です。なのでなかなか村に人が帰ってきてくれないのです。自分はそんな悪い事は思いません。BBQで福島のお米を食べるとすごく美味しかったし、空気も都会よりも全然綺麗でとてもいいところだと思いました。

最後に今回の災害ボランティアに参加して自分は福島はいいところだと周りの人たちに広めていきたいと思いました。小さなことかもしれないけど復興の力になっていきたいと強く思いました。



草だらけの田んぼ

## 自分の目で見える大切さ

3年G組 佐藤花音

私は、八月七日・八日に福島県の被災地を訪問しました。被災地は、未だに福島第一原発の影響で帰宅困難区域に指定されている地域があり、指定が解除された地域でも人が戻らない現実があることを知りました。帰りたくても帰れない、帰れるようになって今でも今の生活を捨てることは出来ない被災者が六年経った今でもこんなにいるのか、と驚きました。自分が今、当たり前前に生活していることがいかに贅沢なことか、その当たり前前の生活を送ることが出来なくなってしまった人達は今どのような生活をしているのか、報道だけではわからないことが実際に自分の目で見て、聞くことにより学ぶことが出来ました。

また、今被災地で必要とされているのが除染作業員でも専門家でもないことに驚きました。今求められているのは、観光客や福島の正しい知識を広めてくれる人、そして地元の子供達と交流してくれる人でした。私は報道内容から、今回のボランティアでは軍手をはめて、汚れても良い服装で瓦礫を片付けることを手伝うと思っていました。しかし、実際のボランティアは福島の食材を食べたり、小学生と交流したりすることで、自分が思っていたボランティアとは全く違うことでした。これにはかなり驚きましたが、前述にあるような内容を訪問した区役所の職員や川内村の村長の話聞き、納得することが出来ました。

これから先、被災地ではまだまだ困難なことが沢山でてくるでしょうし、報道内容だけでは勘違いしてしまうこと、知らないままになってしまうことがあると思います。ですが、そのようなときにこそ、実際に自分で現地に足を運んでみるのが凄く大事なことであったと学びました。現代では、インターネットなどで調べれば多様な情報が得られるけれど、だからこそ自分の目で見、聞き、体験することが必要であると感じました。



津波で破壊された堤防と建設中の堤防

# 敬愛ボラ学習に行って

3年K組 大竹 陸

私は2日間の震災ボランティアで福島県の小高区や川内村に行きました。ボランティアの内容は、1日目は小高区役所へ行き今の小高地区の現状を知り、バスで震災の被害にあった場所を見て周り、川内村にある「いわなの郷」というところに泊まりました。

小高地区は今、住民が戻りつつあるそうですがその半数は高齢者だそうです。また、原発事故の作物への風評被害もあったそうです。ですが、実際はとても美味しいものばかりでした。なので一刻も早く元の小高地区に戻って欲しいと思いました。

そして、バスの中から震災の被害にあった場所を見た時は本当にここに人が住んでいたのか、と考えさせられるほど静かで荒れ果てた状況でした。昔たんぼだった所には木が生い茂っていたり、津波で流され何も無くなってしまった所にポツンと家のコンクリートの部分が数個だけ建っているという状況でした。そこで私はただただ写真を撮ることしかできませんでした。またその時に、これでも復興が進んでいるほうだと聞いて凄く辛い気持ちになりました。

川内村にあるイワナの郷はとても自然が豊かで、とても落ち着ける場所でした。そこで自分たちで釣った魚を食べた時には自然のありがたさと、今の自分がどれだけ恵まれているかをしみじみと感ずることが出来ました。

2日目は川内村の小学生たちと遊びました。小学生たちは被災したことなど関係ないと言わんばかりの元気で溢れていて自分たち高校生が振り回されそうなくらいでした。小学生たちとは体育館の中でリレーや鬼ごっこ、ドッジボールをしてたくさん遊びました。

私は今回のボランティアに参加し、自分の体で直に被災地の空気に触れることで今の被災地の現状が見えた気がします。そして、メディアに取り上げられていないだけで福島の復興はまだまだ終わっていないということを認識することができました。



津波被害の家屋

## 敬愛ボラ学習に参加して

3年K組 萩田里美

私がこの敬愛ボラ学習に参加した理由は、震災の現場を自分の目で見たいと思ったからです。震災の日、私の部屋は机に並べられてた本が全て落ちていたり、祖父の家は瓦が何枚かはがれ、裏山が崩れていました。そして祖父の住んでいる地域の道路は地割れを起こしておりすごい状態になっていました。千葉がこれだけの被害を受けていたら、被災地はもっとすさまじいと思っていました。実際テレビを見たら想像以上の被害を受けていました。なので、自分の目で被害状況を確認したいと思い参加しました。

8月7日、福島に近付いていくにつれて放射線量を計る装置が高速道路に設置されていました。初めの方は  $0.1\mu\text{ Sv/h}$  ぐらいの数値でしたが、原発があった地域では数値が徐々に高くなり、 $3.0\mu\text{ Sv/h}$  にもなりました。道路を通るだけなら平気と言われましたが、やはりすこし不安な気持ちになりました。福島に着いてから目に付くのは、大きい黒い袋が積み重なっていた場所がたくさんあったことです。それらは全てがれきなどでした。まだたくさんのがれきが処分されておらずものすごい量ありました。そして、住民の戻ってきている地域と戻ってきていない所の差がすごかったです。

そして、福島に来て一番すごいと思った所は、人たちの優しさです。一番大変でつらい思いをしたのは被災した人たちなのに、私たちに優しくしてくれました。小学生たちもとても元気がよく、私より何倍も強いなと思いました。

今回の経験を生かしていきるような大人になりたいです。そして大学生になったらもっといろいろなボランティアに参加したいと思います。



## 「敬愛ボラ学習」に参加して

3年K組 松浦美咲

私は今回敬愛ボラ学習に参加して、様々なことを学ぶことができました。

福島に行くまでの道には緑があり、自然が広がっていました。しかし福島に近付くにつれて緑が少なくなって行きました。また道路の端には放射線量が書いてある看板がありました。まだ震災による放射線の影響が続いていることがわかりました。

車内からの視察ではなにもない所や手付かずな所がありました。海の近くの建物は流されているものが多かったです。堤防は思っていた以上の高さで造られていて、津波の怖さを改めて感じました。

川内村のいわなの郷に着いてからはイワナ釣りをしました。初めての釣りだったけれど釣ることができ、貴重な体験ができたので良かったです。

川内村の村長さんの話の中で印象に残ったのは、当時の中学二年生だった子の言葉です。とても川内村が好きだという思いが伝わってきました。他にも同じ思いの人がいると思うので、早く復興して元々住んでいた人達が戻ってきてくれれば良いなと思います。

二日目は川内村の子供達と遊びました。子供達はとても明るく元気いっぱい楽しかったです。たくさんの元気をもらいました。

二日間と短い間だけど、被災地の今を知ることができ、様々な体験ができたので良かったです。六年以上経っているため復興はだいたい終わっていると思っていたけれど、まだまだ時間が必要だということがわかりました。今後は私にできることがあれば積極的に行動していきたいです。被災地が一日でも早く復興することを願っています。



川内村の子ども達と

## 敬愛ボラ学習に参加して

3年L組 久保田 星

東日本大震災から6年経ち、初めて震災地へ向かった。常磐道関本PAを出発後、環境が変わった。高速道路から見えるのは、未だ避難指示が解除されていない区域、田んぼや畑は手入れがなく、無造作に放置されていた。また、所々にある看板には、車で少し走っただけで $2.5\mu\text{ Sv/h}$ も変わる放射線量が表されていた。

南相馬市小高区では、区長によるセミナーと区内の視察が行われた。現在、避難指示は解除されていて、震災前の23%が戻ってきているという。復旧・復興する為に、施設の建設や生活の支援などを取組んでいる。しかし、病院や店は、風評被害や人口の少なさから再開できずにいる。また、以前は盛んであった豚・牛は殺処分され、再開の目処はないそうだ。視察中、出発後しばらくは綺麗な家が並んでいて、復興しているのだと感じた。しかし、沿岸部へ進むにつれて、修理中や、無人の家が増え、手入れされていない草木が見渡せるようになった。横を通り過ぎるのはトラックばかり。左右を見ると、仕切りがあり通行許可証が無いと入れなくなっていた。

私達が泊まった「いわなの郷」がある川内村は、復興のために、震災前より3~4倍の予算を使用している。それにより、低賃金での雇用を求めているが、人員確保が難しくなるなどまだまだ解決しなければならない問題を抱えている。完全な復興をするのは30~40年後だと言われている。それを少しでも短くする為に、私達は被災地の現状を知り、まだ知らぬ人へ伝え、多くの人が震災について覚えておく必要があると考える。そして、私自身今回のみでなく、何回も、何十回でも復興を願い被災地から脱却するまで関わっていきたく強く考える。



いわなの郷交流館で川内村の遠藤村長の説明

## 福島へ行って感じたこと

3年M組 野島芽衣

東日本大震災から6年が経ち、福島を訪れました。私は、将来福祉や国際協力に携わりたいと考えているのでこのボランティアを通して今ある現状を実際に行き、知りたいと思い、参加しました。事前学習では、ドライバーの堀内さんの話を伺い、震災の悲しみはこれからもずっと残りつづけるのだと改めて感じました。

実際に福島に入ると、黒いビニールに入った汚染物が大量に置いてあったり、手入れができなくなった荒地などがありました。また、双葉町に入ると「帰還困難区域」と書かれた看板を目にしました。人の立ち入ることができないこの町はとても静かでした。また、ガソリンスタンドには6年前の車が止まったままになっていました。そして、バスの中から遠くに小さくある原子力発電所を見ました。“本当にあの原発事故が起こったんだ”と言葉にならないものを感じました。

一方で、新しい堤防が建設されていたり、市街地には人々の生活が戻っていました。震災後建てられた建物もたくさんあり復興が進んでいました。復興に向けた取り組みについての話を伺い、役場の方々の努力があるからこそ、まちの復興があるのだと感じました。また、川内村では、村長さんに話を伺いました。震災で、人と人とのコミュニティや信頼関係が崩れてしまうなど、目に見えない爪痕を残しているのだと初めて知りました。仕事の場の確保など、故郷に戻りやすい環境づくりに取り組んでいました。また、福島の色々なところで“復興に向けて頑張ろう”という看板があり、皆で前に進んでいるのだと感じました。

私たちにできる事は小さいことですが、福島の食材を買ったりして、復興の手助けをしたいです。まだまだ復興に向けて頑張っている人がいます。そのことを忘れず、福島の良さを伝え、風評被害を減らしていきたいです。そしてまた、福島に行きたいです。



木々の向こうは福島第一原子力発電所

## 現地での様子





ご多忙の中、説明して下さいました川内村遠藤村長



避難時と同じ、おにぎり2個と味噌汁の朝食



津波被害の建物と請戸小学校



いわなの郷 自然体験(いわな釣り) 2017/08/07 1



避難時の朝食の説明をする北原先生



ちょっと緊張気味の川内村の子供達



リレーのスタート



ドッジボールのチーム決め



仲良し



力投



男の子たち



美味しかったスイカ



みんなで体育館の掃除



握手 握手



握手 握手



お別れのあいさつ



みんなで見送ってくれました

## 事後学習

### 文化祭での展示と報告会

9月30日の文化祭で、5回に分かれて参加者が体験発表をしました。



震災ボランティア体験発表 時間割表

|                    |                       |                      |
|--------------------|-----------------------|----------------------|
| 第1回 発表時間<br>9:30~  | 3D 須藤裕里菜<br>3M 野島 芽衣  | 3D 高橋ありす             |
| 第2回 発表時間<br>10:30~ | 3D 野田 洸太<br>3L 久保田 星  | 3K 大竹 陸              |
| 第3回 発表時間<br>11:30~ | 3B 斎藤 菜々子<br>3C 松戸 響子 | 3C 小林 美月<br>3D ニツ本ゆり |
| 第4回 発表時間<br>12:30~ | 3A 油橋 遥<br>3D 村田 倫幸   | 3A 若月 豊<br>3G 伊藤 透貴  |
| 第5回 発表時間<br>13:30~ | 3A 木村 ちひろ<br>3K 萩田 里美 | 3G 佐藤 花音<br>3K 松浦 美咲 |

### 敬愛ボランティア学習参加証明書授与式

9月19日、参加証明書を校長から授与しました。



## 【資料 1】

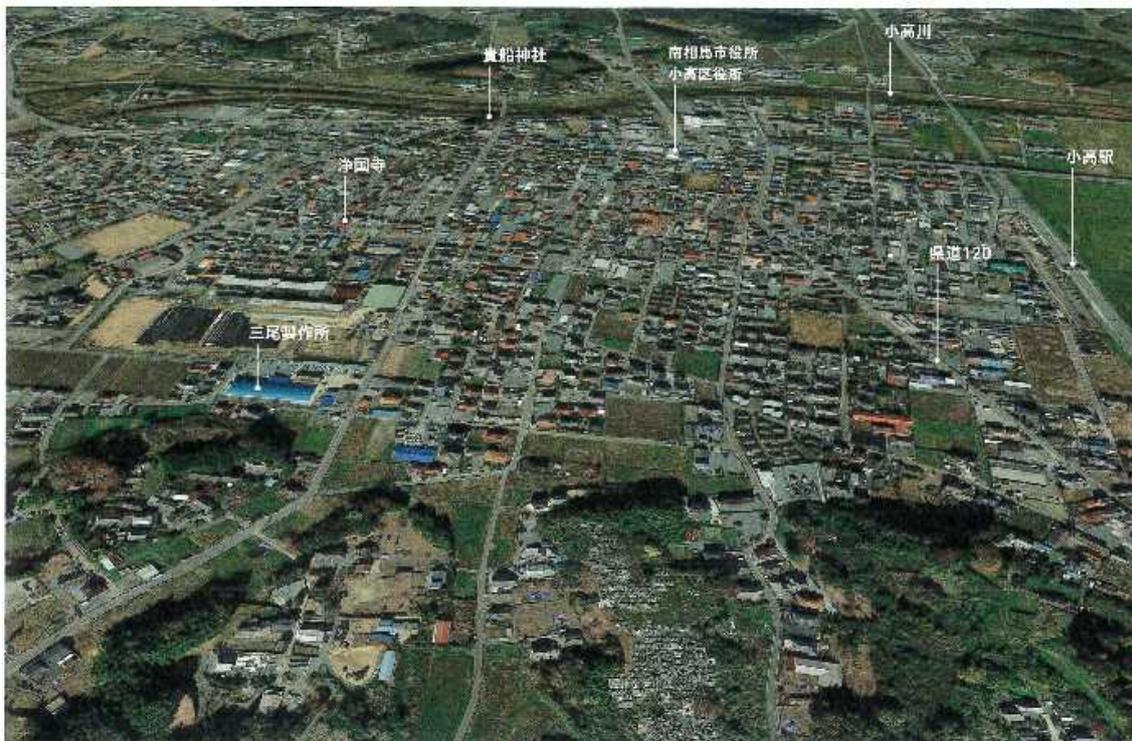
# 今回訪問した原発事故避難市町村の震災後

(NPO 法人福島住まい・まちづくりネットワーク 2017 年 3 月 31 日発行  
「福島アトラス 01」より)

## 南相馬市

福島県浜通りの北部に位置する。東日本大震災における津波による死者・行方不明者は 650 名を超え、福島県内で最も多い。また、福島第一原子力発電所の事故により、市の 43 % (小高区の全域と原町区の一部) が避難指示区域に指定された。同事故によって市外への集団避難がいったん行われ、福島市に役場出張所が整備された。応急仮設住宅や災害公営住宅は南相馬市内に整備され、避難区域内でも集会所、医療施設、商業施設などが再開・整備されている。2016 年 7 月に避難指示解除準備区域、居住制限区域の避難指示は解除され、現在は市の 6 % が避難指示区域 (帰還困難区域) に指定されている。

小高 0493



## 浪江町

双葉郡に属し、浜通りに位置する。福島第一原子力発電所の事故により、全域が避難指示区域に指定され、全住民が町外へ避難している。事故直後に避難した二本松市を中心に、福島市、二本松市、本宮市などに応急仮設住宅と共に住民利用施設が整備されている。また主に南相馬市、いわき市、二本松市において復興公営住宅の整備が進められており、順次入居が開始されている。また、浪江町復興計画では 2017 年 3 月に避難指示解除準備区域、居住制限区域の避難指示解除を予定している。町内には役場機能のほか、一時帰町時に利用できる仮設診療所、複数の事業所がすでに開設されている。

## 双葉町

双葉郡に属し、浜通りの中央に位置する。福島第一原子力発電所が立地しており、事故により全町域が避難指示区域に指定された。帰還困難区域が町の 9 割を占めており、避難指示解除の時期は 2017 年 2 月時点では示されていない。事故後、役場は埼玉県の加須市に移転したが、2014 年にいわき市に再度移転し、同時に公立幼稚園・小中学校もいわき市内で再開された。その他の地域では、郡山市、福島市等に応急仮設住宅が整備され、復興公営住宅への入居も開始されている。町内では、2015 年に避難指示準備区域に再編された大字両竹、大字中浜を復興産業拠点として整備していく計画となっている。また、町内への中間貯蔵施設の建設受け入れが決定している。

## 大熊町

双葉郡に属し、浜通り中央部に位置する。1971 年に町内に福島第一原子力発電所が開所し、多くの町民が関連事業に従事していた。福島第一原子力発電所の事故により町の全域が避難指示区域に指定された。町の住民の約 96 %が居住していたエリアは、現在も帰還困難区域となっている。行政機能については、事故直後は田村市、その後会津若松市へと移転している。その後はいわき市や郡山市にも仮設住宅、復興公営住宅、役場機能が整備され、いわき市への避難者が特に増加している。町内の計画については、「大熊町復興まちづくりビジョン」で、放射線量が比較的低い大川原地区を最初の復興フィールドにすることとしている。

## 富岡町

双葉郡に属し、福島県浜通りに位置する。町内には檜葉町とまたがって福島第二原子力発電所が立地しているが、1975年の着工以降原子力発電所の建設の従事者の増加により人口、就業構造が変化した経緯がある。町内には常磐線の富岡駅と夜の森駅の二つの鉄道駅を中心とした町の拠点が形成されており、今後の町内復興の拠点としても位置付けられている。福島第一原発の事故により町内全域が避難区域に指定され、事故直後は郡山市に避難を行った。現在は応急仮設住宅および復興公営住宅が多く整備され、町外の拠点である郡山市といわき市への避難者が多い。帰町は2017年4月を目標としており、町内の土地利用計画の検討が進められている。

## 檜葉町

双葉郡に属し、浜通りに位置する。町の北東部に福島第二原子力発電所が立地している。福島第一原発事故により、町の約8割が避難指示準備区域に指定され、全町避難を行っていた。当初、役場は会津美里町に避難したが、その後いわき市へと移転した。2015年9月に避難指示が解除され、一部の住民が帰還を開始している。一方で、いわき市内には現在も仮設住宅の運営が続けられている。町役場機能は町内に帰還しており、駅周辺のエリアにコンパクトタウンを整備する計画が進められている。また、いわき市で運営されていた小中学校も2017年4月に町内に帰還することが決まっている。

## 広野町

双葉郡に属し、浜通り南部に位置する。福島第一原子力発電所の事故後、町長避難指示で全町民が避難を行い、役場や学校はいわき市に移転している。2012年3月3日に町長による避難指示が解除され、他市町村に先駆けて本格的な帰還が開始された。2016年6月時点では全町民の約半数にあたる約2,700人が町内に居住している。届け出をせずに家族の一部が帰町する所帯、避難先と二拠点居住をする所帯などもあり、それらを含めるとさらに多くの住民が町内で生活していると考えられる。また、産業団地での企業や研究機関の誘致、双葉郡8町村の子どもを対象とした県立の中高一貫校など、双葉郡全体の復興拠点としても位置付けられている。

## 川内村

双葉郡に属し、浜通りに位置する。福島第一原子力発電所の事故により、村の東部が避難指示区域に指定された。災害直後は全村避難を行ったが、翌2012年1月に村長が帰村宣言を公表し帰還が開始された。いったん郡山市に移転した役場機能も2012年に村内に戻った。また、2014年10月および2016年6月にそれぞれ避難指示解除準備区域の避難指示が解除され、村の全域が避難指示区域外となっている。村内には複合商業施設が新設されたほか、医療サービス、学校等も再開されている。帰還者は2012年以降徐々に増加しており、現在は約68%(2017年1月時点)と推定される。

上川内 Kamizawauchi



下川内 Shimizawauchi



【資料 2】

# 震災直後の南相馬市 (語り部 堀内広宣さんより)





## 編集後記

「敬愛ボランティア学習」は今回で3回目となりました。平成23年3月11日に発生した東日本大震災から2年後の平成25年、当時の北原校長の「この現況を何とかしなければという思いに駆られ」て「震災ボランティア学習」が実施されました。その後は、北原校長の退職で実施されませんでしたでしたが、平成28年には高岡校長の呼びかけで、北原先生を参与として志保澤副校長を中心に再び実施する運びとなりました。今年度は、副校長の都合により、途中からではありますが参加させていただきました。企画・募集から事前学習、現地の方々との連絡、当日のタイムスケジュールから事後学習の予定まで、北原先生、副校長、昨年も参加した上田先生と千葉先生、さらに語り部兼ドライバーの堀内さんに尽力していただきました。私は、ただそれに乗っただけで、大変心苦しく思っております。

参加生徒は3年生18名、それぞれの思いがあつての参加でしたが、やはり実際に現地を訪れて、参加しなければ得られない経験をしたようです。それがこの報告書に現れていると思います。この経験は、必ず彼らの将来に充分活かされることでしょう。

関係者の皆様のご協力で「敬愛ボランティア学習」が無事実施され、この報告書が発行できましたことに、深く感謝を申し上げます。これからも被災地の一日も早い復興をお祈り申し上げます。

教頭 安藤正夫

### 2017年度「敬愛ボランティア学習」報告書

発行日 平成29年11月1日

発行 千葉敬愛高等学校

責任者 教頭 安藤正夫

編集協力者

(校長)高岡正幸 (副校長)志保澤秀幸

(敬愛大学客員教授)北原文成

(引率)上田知広・千葉さと美

(語り部・ドライバー)堀内広宣

印刷所 (株)敬愛サービス・勝美印刷(株)